

メナール教授講演「マルコ・ポーロの『東方見聞録』における 日本のイメージ」(配布資料)

(作成：佐佐木茂美)

I. Marco Polo とは？

1254年の生まれか？ マルコは東方貿易で地中海に栄えた北イタリアの都市ヴェネツィアに生まれた。旅の商人であった父ニコロと叔父マテオの中東にあった間(1253-1269)の事であった。1270年あるいは1271年、17歳になったマルコは彼らとともにシルク・ロードを東アジアに向かう。ポーロ一家は旅の商人以上の役割を担い元朝下の中国にいたる(1275)。新教皇グレゴリウス十世の書簡をたずさえていた。クビライ(ジンギス・カーンの孫)に仕え17年が過ぎる。ポーロ一家二代は既にマルコの時代となっていた。遂に帰国の機が到来し(1293)、海路二年をかけてイタリアに戻る(1295)。

II. 『東方見聞録』の生成

1298年、自衛権を相互に発動し戦闘関係にあったヴェネツィアとジェノヴァはマルコを巻き込み、かれはジェノヴァの囚人となる。東洋にあった25年の折々ノートを取り、持ちかえったらしい。40歳を過ぎていたかれは、仲間の囚人たちに体験を語り、奇想天外な話に「百万の」というあだ名がついた。彼らの中の一人が、フランス語散文でアーサー王伝説を典拠とする物語を書いたルステイックロであり、マルコの口述(ヴェネツィア語)を書き取った(フランス語)。1298年のことであった[以上「序論」]。

III. メナール教授(ソルボンヌ大学名誉教授)の講演

教授は丁度12年前、1992年10月28日、明星大学に於いて『マルコ・ポーロと未知の国・アジアの図』(原題「マルコ・ポーロの『世界の叙述』の彩色画」)の講演を行った。そのとき次の彩色画(イラスト)の手書き写本にもとづいたものであった。1) パリフランス国立図書館所蔵、(BNF., f. fr. 2810)、2) ロンドン、大英図書館所蔵、(London, British Library, Royal 19D1)、3) ロンドン、大英図書館所蔵、(London, British Library, Royal 20D1)、4) オクスフォード、ボードレイアン図書館、(Oxford, Bodleian Library, Bodley 264) 2004年10月12日の講演は『世界の叙述』——日本語では『東方見聞録』のタイトルで知られる——のなかで日本に関する記述とヨーロッパ(上記写本)および日本側の「元寇」の絵巻(「絵詞」)を用い、比較文化的アプローチとなっている(講演「要旨」参照)。

IV. メナール教授の刊行中の校訂本

メナール教授の刊行中の校訂本は十分な写本の研究後に導きだされた未刊行のロンドンの大英図書、Royal 19D1(1330-1340頃)(上記III; 2)にもとづき今進行中である。

日本語訳は「イタリア語混じりのフランス語」の特徴をそなえるパリフランス国立図書館所蔵(BNF., f. fr. 1116)(1315年頃)にもとづいて刊行されてきたL. F. ベネデットの校訂本、ないしその英訳を用いた重訳となっている。岩村忍『マルコ・ポーロの研究』、上巻、(1947); 青木富太郎、『マルコ・ポーロ旅行記』(1954); 同、『マルコ・ポーロ『東方見聞録』』(1969、1978); 青木一夫、『マルコ・ポーロ東方見聞録』(1960); 愛宕松男、『東方見聞録』、上巻(1970)、下巻(1971)など。ほかに上記III, 1)(15世紀初頭)の翻刻版と訳

がある（講演「要旨」参照）。

メナール教授講演：『散文トリスタン物語』に於ける独創性』

(Innovations dans *le Roman de Tristan en prose*)

(配布資料)

(作成：佐佐木茂美)

I. 『トリスタンとイゾーの物語』はフランス12世紀の創造した「神話」、「伝説」

筋書き=1. マルク王（コルヌアーユ）、トリスタン（マルクの甥）、イゾー（アイルランドの王女、マルクの妃）2. 魔法の飲料（嫁ぐ娘イゾーのためにマルクとの結婚の持続を念じて用意される）3. イゾーと使者として迎えにいったトリスタンとがそれを飲み干す、4. 魔術による拘束から永遠の愛の概念が生まれる、5. マルクとイゾーの結婚、叔父と甥の軋轢、6. 恋人たちの裏切り、7. トリスタンによるイゾーの略奪、8. 恋人たちの死。トリスタンとイゾーの恋の物語、この人間の“情念”のパターンは“愛”と“死”の形式でありヨーロッパの文化に深く根差す

II. 日本での「トリスタンとイゾー神話（伝説）」の受容

1. ドイツの詩人 リヒャルト・ワグナー（Richard Wagner）（1813-1883）の『トリスタンとイゾルデ』（*Tristan et Isolde*）（1857-1859）はまずフランス語で発表され、演奏された。

2. ジョセフ・ベディエ（JOSÉPH BÉDIER）（1864-1938）フランス中世学者の新版『トリスタン・イゾー物語』（*LE ROMAN DE TRISTAN ET ISEUT*）（1890）で特に一般に知られることとなる。

2. は、1953年から文庫本入りし、版を重ね日本での受容に関してはとくに重要。（訳、佐藤輝夫、岩波書店）

III. 12世紀の『トリスタンとイゾー物語』（韻文）

日本では（上記（II. 1. 2.））19世紀の産物との誤解があるが、12世紀の創造。

3. ベルール（Bérout）フランス語による作品（1170-1180年）の断片（4485行が残る）

4. トマ・ダングルテール（Thomas d'Angleterre）、フランスの詩人による制作（1172-1176の間）。残存断片詩行3146行。（上記1.はこの系統を引く）

IV. 13世紀の『トリスタン物語』（散文）

5. 『散文トリスタン物語』（*Le Roman de Tristan en prose*）

III. 3. 4.（上記）は書き換えられ、詩型式からフランス語による散文の形式をとった本書がメナール教授の講演の主題である。まずイゾーの名が消える事に注意。物語は語り継がれて広まり、改変をきたす。本書では“恋人”トリスタンから“騎士”トリスタンの一生とその運命に人々が熱狂する事になる時代の産物である。『ランスロ』、『聖杯の探索』、『アーサーの死』などを組込んだ長編ロマンス……もともと「フランス語」の意味……となる。

V. メナール教授の指導による校訂本の刊行

「流布本」（「最も広く読まれた」）が1987から1997年までの10年をかけ、9巻が刊行さ